

聞くこと・見ることから

「読むこと」へ

一年上「はなのみち」の実践から

新しい学習指導を考える会

一 はじめに

幼児が何度も繰り返し同じお話を聞きたいとせがむことがある。知っているお話ならもう聞かなくてもいいのではないかと思うが、そうではない。内容は分かっているけれども、お話を聞く楽しみは、お話の移りゆきに従って心を動かすところにある。はらはらしたり、笑ったり、不思議に思ったり、想像をめぐらしたりしながら聞くので飽きることはないのである。

また文字を読めなくても、子どもは絵本をよく広げている。親と子が同じ絵本を見ながら、あれこれお話ししているのを見ると、「いつかして絵本を楽しむ心、気づく心が育っていくのだな」と思われる。

一年生になって文字が読めるようになった子どもたち

が、読むことの楽しさと読むための力とともに獲得していくために必要なことを考えてみたい。

二 挿絵と文をつなぐ

一年上に「はなのみち」という物語がある。四枚の挿絵と六つの文と二つの会話文からできている。挿絵が起承転結を表し、さまざまなドラマが隠されている。挿絵を丹念に読み取っていくと、登場人物が話していることも聞くべき素晴らしい物語である。

1 主人公をつかむ

「くまさんが、ふくろをみつめました。」第一文で主人公のくまさんが、ふくろを見つけたことが分かる。からのどの絵にもくまさんが登場していることを見つけて、場面の様子や季節の感じ、表情、視線、仕草などをとらえておくこと次につながる。「くまさんが」に傍線を引いたり、したことに印を付けたりしてみると、あらすじが分かってくる。自分で見つける楽しみが子どもを引きつけ、くまさんの喜び悲しみに寄り添うという視点もできるであろう。

2 音読できるようにする

「おや、なにか。いっばいはいっばい。」など、初めて出てくる「、」促音の「っ」など、正しい発音、丁寧な視写などを通して理解を深めながら、はつきりと音読でき

るようにさせたい。読んでもらっていたときや絵を眺めていたときとは違う、自分で読む「と」の美感や達成感は快い。くまさんが、「おや」と不思議に思っている表情、「いっばい」入っている楽しみななど、絵や生活実感と結び付けて読むと、音読ははつきりと心を伝えるものになってくる。

3 比べて読む

「しまった。あながあいていた。」で「いっばい」入っていた袋に「はなのみち」もありませぬ。「それに気がついたくまさんの驚きと落胆。」いっばい「と」なにも「の違いた」子どもたちはくまさんの「しまった」という気持ちを痛いほど感じる。ではひとりのかまさん「と」では「と」もだちのりすさん「がそばにいて、語りかけてくれていいる姿を見つけた」「やさしそつだね。」と気づく子どももいる。はあたたかいかぜ……」「ながいながいはなのいっばいみちができました。」の二文でできている。この挿絵を比べてみると、「あ、くまさんの家の煙突から煙が出ている。」「うちは池に何も見えなかったのにおたまじゃくしやかえるがいるよ。」「とままをまな違いを子どもたちは探しだし、季節の違いを感じ取る。」ながいながいはなのいっばいみち「は、くまさんがりすさんに聞きにいったときに通った道筋にできている。」「ここで初めて袋の中にいっばいあったものが花の種であったことが推

測できる。登場人物たちが花の一本道の美しさと春の訪れの喜びを全身で表している様子に触発され、子どもたちからさまざまな言葉が生まれてくるであろう。

4 登場人物の会話を想像する

ある教室で、「おや、なにか。いっばいはいっばい。」の続きの言葉を考えさせたところ、「たねだかなんだかわからない。」「という板書の後、「種」という言葉に触発され、「ちよつとまいてみよう。」「という意見も出された。次の文は「くまさんが、ともだちのりすさんに、ききにいききました。」「である。種だと分かっていたら聞きにいかないであろう。」「読むこと」における想像は、文章をよりどころにしたものでなければ、挿絵を読む場合もあるが、勝手な憶測になってしまう。くまさんの疑問を十分つかんだ上で、「いっばい」の中身を想像したり、知りたいという思いに寄り添った読みがされると、子どもたちの想像はぐくみ活気づく。

三 読む力を育てる

子どもたちには言葉を手がかりに、言葉にこだわって読む態度を身につけて、読書の楽しみを味わってほしい。ペープサートを使ったり劇化することも楽しい言語活動ではあるが、根底に文を正しく読むことをおいてこそ読む力を育てることにつながっていくと思ふ。